●7月選評

小島なお

・田崎森太（東京都）

黒点を失くした犬よ片かげり

たしかこのあたりに埋めて隠したはずの黒点。大事なものを失ってしまった落胆に、いま犬は太陽そのもののように片側を宇宙の闇に翳らせて沈む。

・いまはじまるの（兵庫県）

新聞の切り抜きみたらサメ映画
あなたは周りをよく見てくれてる

インモラルな巨大サメのモンスターB級映画。切り抜いておくには通俗的すぎるけれど、その通俗性がたぶんあなたの美質を裏打ちしているのだろう。

・小川いなせ（茨城県）

どの鍵も入る鍵穴
どの言葉でも泣くあなたに
わたしは錆びた

たったひとつの鍵を容れるための鍵穴なのに。私が選んだたったひとつの言葉でしか泣いてほしくないあなたなのに。やすい涙で私はもう疲れてしまう。

・かわなご　まい（埼玉県）

早朝の蝉は昨日のそばにいる

早朝から啼きしきる蟬。その翅の震えは、そのいのちは限りなく昨日と地続きの直線上にある。ふたたびは還らない昨日を慰撫するように幹を抱きしめて。

・五月閉じ花（北海道）

老眼で掴めていない許可の雲

何事も許されているのはほんのひとときの間だけ。ただでさえ形のない雲は掴むのに苦労するのに、ましてや老眼の視界にはその猶予さえ手応えがない。

・蝸牛（奈良県）

ゆうれいは絵筆とゆれて
一人部屋

ペン立てにさやさやと筆先を靡かせる絵筆。筆の一本のように隣り合って、ゆうれいもすやすやと淡い身体を戦がせる。筆もゆうれいもいまはしばしの休息。

・お寺（愛媛県）

私の鼻血〈貴方の生理
優しさは
解らぬものからできますように

ほんとうの優しさに目的はない。衝動のような、反射のような感情をこそ優しさと呼べたら。鼻血の血も生理の血も、でどころ不明なあたたかさで肌をつたう。

・石橋トミ（東京都）

誕生日母が早めに帰ってて
町には小さく餃子が降った

誕生日には母が私の好物の餃子を焼いて迎えてくれたのだ。町の空に見えないくす玉が割れて、餃子がじゃんじゃん降って、私の生誕が祝われていた頃。

・ときたま（東京都）

似た人を沢山見たらそれは距離

たんなる偶然か。あの人への思いが似た人を私に見させるのか。相手と自分との関係の距離に不可思議の力が働いている現象をたぶん運命と呼ぶ。

・清水　大稔（兵庫県）

たましいはずっと桜の動きして
空気を撫でるように生ぬるい

咲きながら散る、収斂と拡散をくりかえすたましいの動き。花びらが空気の肌に沿って落ちてゆくとき、たましいもまた肉体を通じて現世を感受している。